

4. 2年保育5歳児S児

忍久保 武士

S児は2年保育児である。4歳児の時は、T児の言葉を受けて、他の友達とその言葉に従いながら遊ぶことが多かった。T児に対するあこがれの気持ちもあり、嫌々でなく楽しんで遊んでいたようである。進級してからは、教師やB児、C児、D児らとともにサッカーをしていたが、思うようにボールをけることができないこともあり、キーパーをすることが多かった。

事例1 「ボールかしてくれん？」

5月23日(火)

いつもなら、園庭に5, 6人が集まりサッカーをしているのだが、この日は当番活動のしいく隊やきゅうきゅう隊で時間がかかり、当番でなかったC児とS児だけがボールを蹴っていた。1つずつボールをもち、言葉を掛け合うわけでもなくドリブルやシュートを黙々としていた。時には手でボールを投げ上げてそれを蹴るなど技を磨いているようであった。そこへ、仕事を終えたB児、D児、E児がやってきた。

D児 「サッカーやろう！」 (その場にいるみんなに対して)

C児とS児は答えるわけでもなくボールを蹴っていた。B児は、二人の様子を見て自分もしたくなりボールを探しに行った。けれども、ボールはかごの中には残ってなかった。そこでB児はS児の所へ寄って行った。

B児 「ボール貸してくれん？」

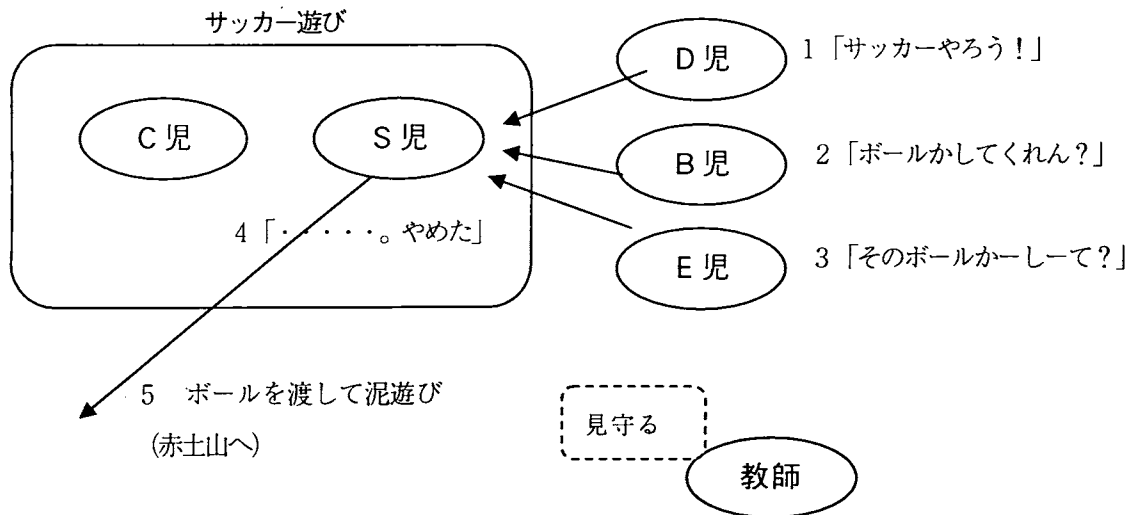
E児 「そのボール、かーしーて？」

E児もB児に続いて寄っていった。D児も近寄っていった。3人に寄ってこられたS児は下を向いて何も言えなかった。数秒後、S児は3人の顔をぱっと見回した。そして、また下を向いて、

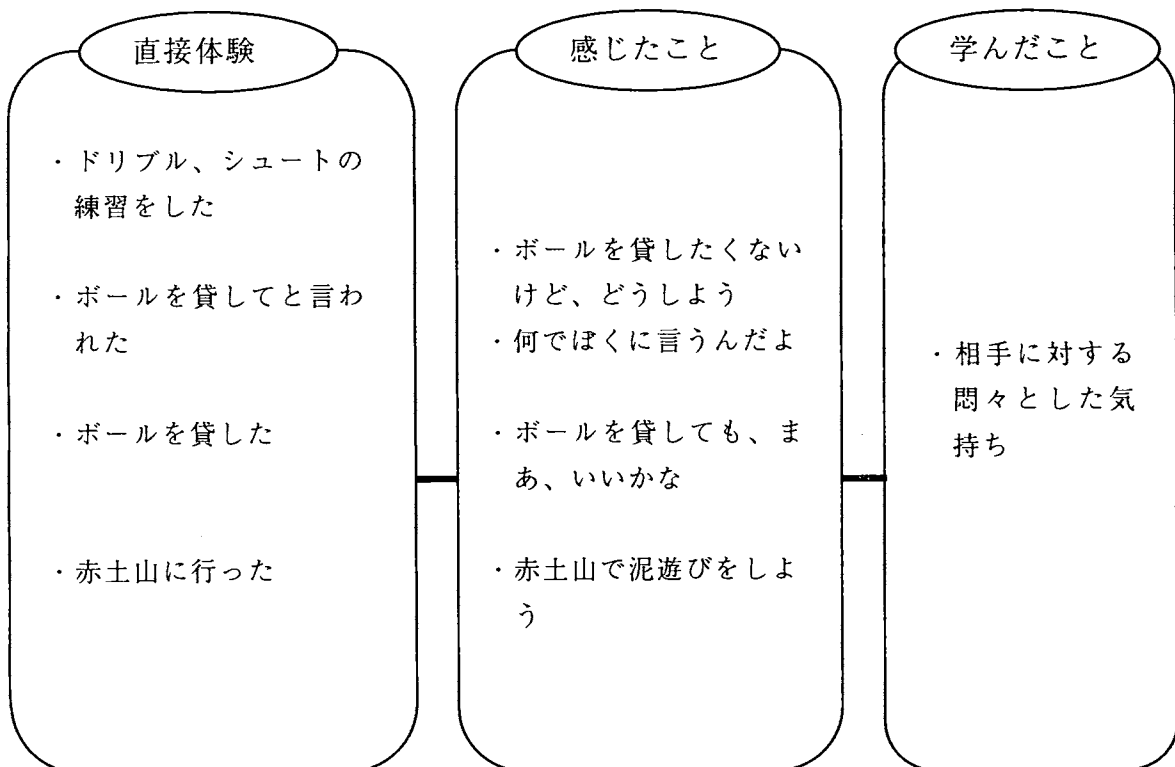
S児 「……………。やめた」

3人に聞こえるか聞こえないかの声で言うと、ボールをふわっと上に投げて走って行った。そして、赤土山で泥遊びをし始めた。

<かかわり>



○社会的側面の学びの様相



○S児の育ちについて

S児は、普段からサッカーの上手な友達のプレーを観察し、自分もできるようになりたいと思いドリブルやシュートの練習をしていた。3人からボールを貸してと頼まれ、どう答えてよいかわからず困ってしまった。本当はボールを渡したくないという気持ちが、ボールをふわっと上に投げて走っていったことから伺えるが、その気持ちを自分で言葉に表して伝えることはできなかった。

○環境の構成について

進級して間もない4月、5月は、思いきり体を動かして遊ぶ楽しさを味わって欲しいと願い、教師も幼児らと一緒にサッカーをして楽しい雰囲気をつくっていた。園生活に不安を抱えながらも、教師が遊びの場に一緒にいるという安心感もあり、S児も毎日のようにサッカーをしていた。

○教師や友達のかかわりについて

教師は、3人の友達がかかわってきた時には遠くから見守ることを続けた。B児にボールを貸してと言われても、サッカーの練習をしたいのでいやだとS児が表現することを教師は願っていた。けれども、S児は自分の気持ちを言葉で表すことはできなかった。S児が自分の気持ちを言葉で表していくために、もっと教師が寄り添い、時には言葉を代弁していかなければならなかった。また、教師がその場に寄り添えなかったならば、S児が泥遊びに移動したときに話を聞きながら悶々とした思いを共有していかなければならなかった。

○今後に向けて

3人に言い寄られたときに、貸したくないという自分の気持ちを言葉で伝えなかっただけでなく、泣いたり、先生に言いに来たりすることもしなかった。教師がもっと寄り添い、S児の悶々とした思いに共感しながら、自分の気持ちを言葉で表せるようにかかわっていききたい。また、S児がほぼ無条件でボールを渡したB児、D児、E児らとの関係を見ていく必要も感じた。

わくわくワールド（宿泊体験）にむけて生活グループを変更した。同質のグループになるように教師が意図的に編成した。自己主張の苦手なS児はF児、G児とともにオレンジグループである。

事例2 「この前、みどりグループやった」

6月20日（火）

今週に入って初めての弁当日のことである。生活グループごとにテーブルを用意し、各々、自分の弁当を広げ始めた。弁当箱や水筒の置き方をみんなで確認し、『いただきます』のあいさつをしようとしている時だった。

H児 「先生、こっち（赤グループ）で食べて」

J児 「先生、こっち（黄色グループ）もいいよ」

B児 「先生、こっち（水色グループ）来て」

それぞれのテーブルで「今日は〇〇グループだよ」と話し合いのようなおしゃべりが始まった。オレンジグループのS児、F児、G児だけは、3人とも何も話さず自分の弁当ばかりを見ていたので、教師はこの3人が気になった。

H児 「先生、1回も赤グループ来たことないし」

K児 「来たよ」

教師 「そんなことないよね。順番やったもんね」

二人とも苦笑いをしていた。「順番」と聞いて、B児が言った。

B児 「昨日、多分オレンジグループで食べとったよ。だから今日は水色グループ」

L児 「昨日（弁当）ないって。この前の木曜日やって」

教師 「この前、どこで食べたんやったかなあ」

幼児らは先週のことを思い出そうとして、ざわざわしていた。その時、

S児 「この前、みどりグループやった」

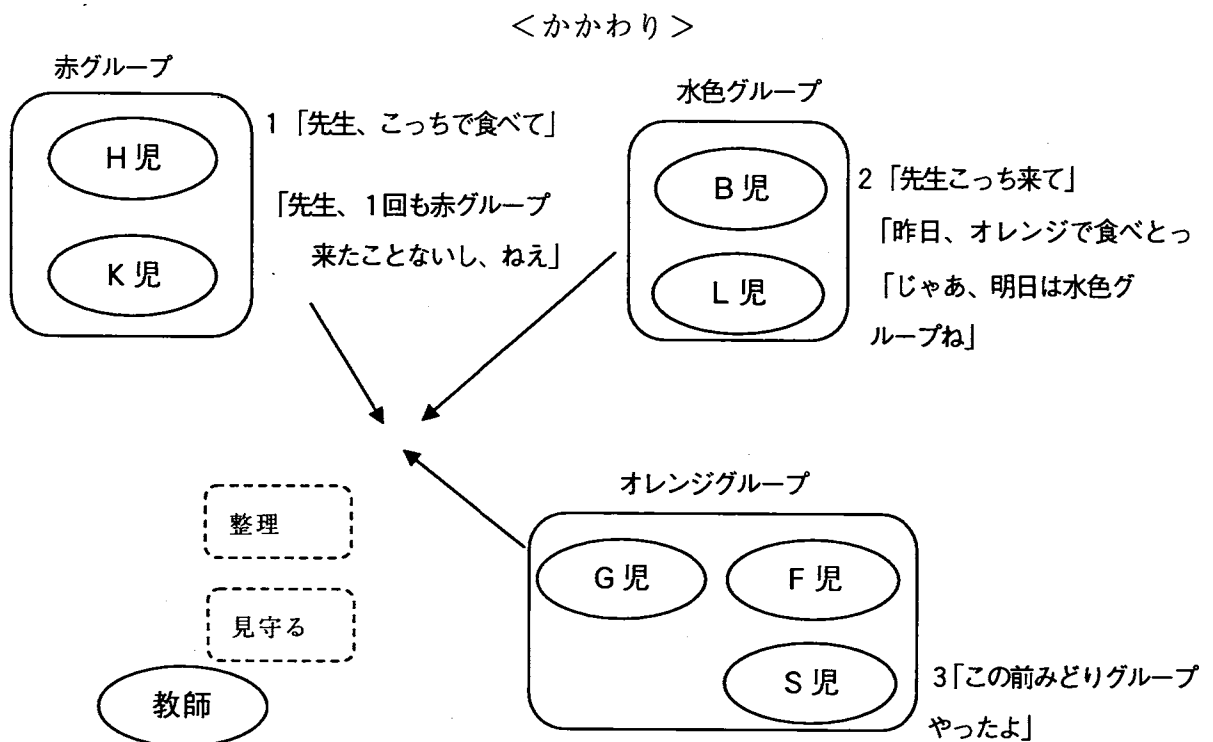
S児は教師の方を振り返って、はっきりとみんなに聞こえるような声で言った。それを聞いて、はっと思い出したようにM児が言った。

M児 「先生、この前ここ（緑グループ）やったよー」

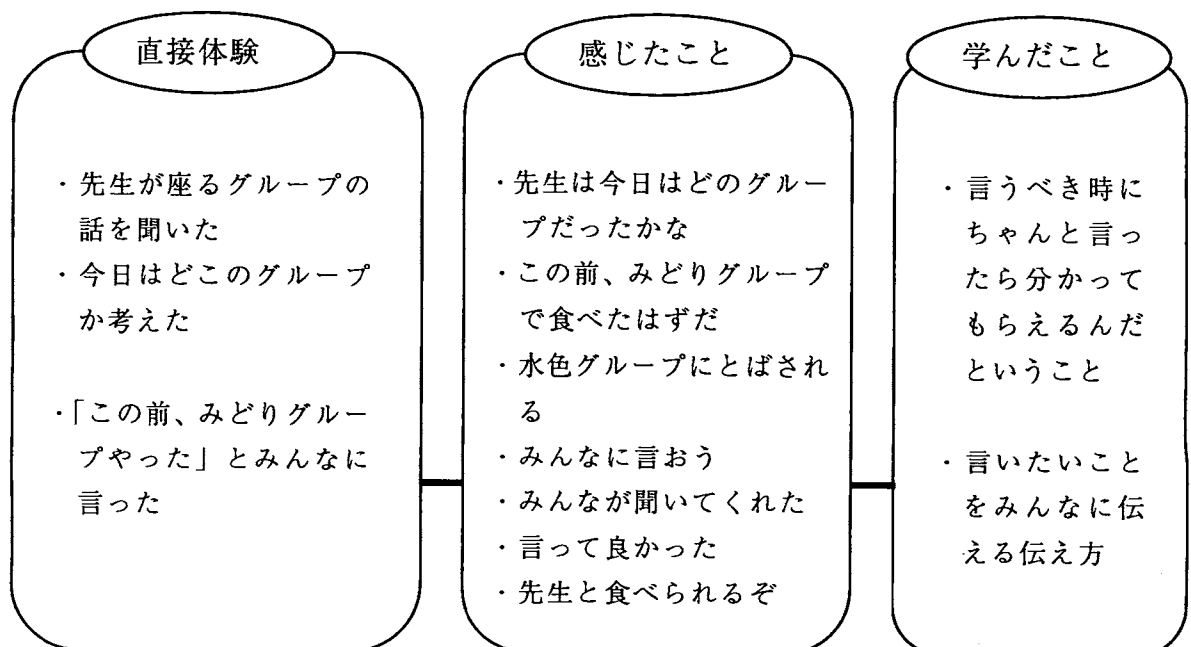
B児 「じゃあ、今日はオレンジグループで明日は水色グループね」

教師 「そっか、わかったよ。じゃあ、今日はオレンジグループなんだね」

幼児らは口々に「いいよ」と言いながら、自分の弁当に目をやりだした。教師がオレンジグループに行くと、S児は嬉しそうに教師の食べる場所を空けてくれた。



○社会的側面の学びの様相



○S児の育ちについて

みんなが、今日はどのグループなのかを考え、話し合っているときに、S児とF児、G児は静かに自分の弁当を見ていたことから、グループのメンバーで話し合えばどうにかなるかもしれないという経験が少なかったことが伺える。今までは、だまってすぎてしまうところだったが、みんなの話しで水色グループになりそうになるのを聞いて、我慢せずに言うことができた。S児の成長が見られて嬉しく思った。

○環境の構成について

1学期は、教師が意図的に仕組んだグループで弁当を食べている。S児、F児、G児のオレンジグループは3人とも自己主張が苦手であり、この日もF児、G児は、みんなに対して何も言えなかった。そのため、他に頼る人もなく、我慢しきれなくなったS児が、自分で言うことができたと思われる。

また、グループごとにテーブルで食べようとしていたため、みんなが固定された場に座っていて誰も危害を加えてこないのが明白だったため、安心して思いを出すことにつながったとも考えられる。

○教師や友達のかかわりについて

最初、教師がどこで食べるのかが問題となったとき、全体の場で思いを出せない幼児も、3、4人のグループでは自分の考えを言い合っている姿が見られたので、教師は幼児らの自由な発言を聞き、整理をした。その中でオレンジグループだけが話し合いにもならなかったのが気にしていた。最後まで、F児、G児はずっと自分の弁当を見ていて、教師がどこで食べるか興味がないようだったことが、結果としてS児に自分で言う決断をさせたのだろう。S児が全体の場で意見を言えたことに対しての教師の評価が足りなかった。また、先生がどこで食べるかという根本的な解決にはなっておらず、そこまで考えさせる切り返しが必要であった。

○今後に向けて

S児がグループや全体の場で発言することは今までほとんど無かった。今後も思ったり考えたりしたことをみんなの前で言わせ、それによってみんなの思考が深まったり、問題が解決できたりしたことを周りの幼児に伝え、S児のよさを認めていく。

天気もよかったので幼児らは外へ出て虫とりをしていた。しばらくして、S児が虫とり網を片手に勢いよく担任に向かって走ってきた。

S児 「先生、ぼくのかまきりが・・・」

教師 「・・・」 (何があったのという様子でしゃがんでS児と、目を合わせた)

S児 「ぼくの見つけたかまきりを、C児がとって行って・・・」

S児 「ほんとはぼくのだったのに・・・」

見ると、C児は両手を閉じて必死にかまきりを逃がさないようにしていた。友達の話も耳に入らず、かまきりに夢中なようだった。教師は事情を聞こうとS児と一緒に近寄った。

Q児 「C児がS児のかまきりをとってあげるって言ってとっていった」

L児 「そうや。C児はS児にとってあげるって言ってたんや。なのに、つかまえたら、俺のもんって言って持っていったんや」

C児 「・・・」 (とにかくかまきりに夢中な様子だった)

C児は依然かまきりに夢中である。教師は発見者が誰なのか、C児がS児にとってあげるという約束をしたのかについて確認した。教師との話の間中もC児は下を向いたままだ。S児はそんなC児の様子をじっと見ていた。すかさずQ児が教師に向かって言った。

Q児 「C児ズルイねえ。S児に返さんなんねえ」

教師 「C児くんはずるいと思う？」

C児 「うん」 (手に持ったかまきりを見て)

教師 「そっか、C児くんもズルイことをしたと思っているんだ」

教師 「でも、ひょっとして、かまきりほしいんだ？」

C児 「うん」 (その言葉を聞き、S児が心配そうな顔になる)

教師 「S児くんは、どう？」

S児 「ぼくが見つけた。絶対欲しい」 (真剣に教師を見て答えた)

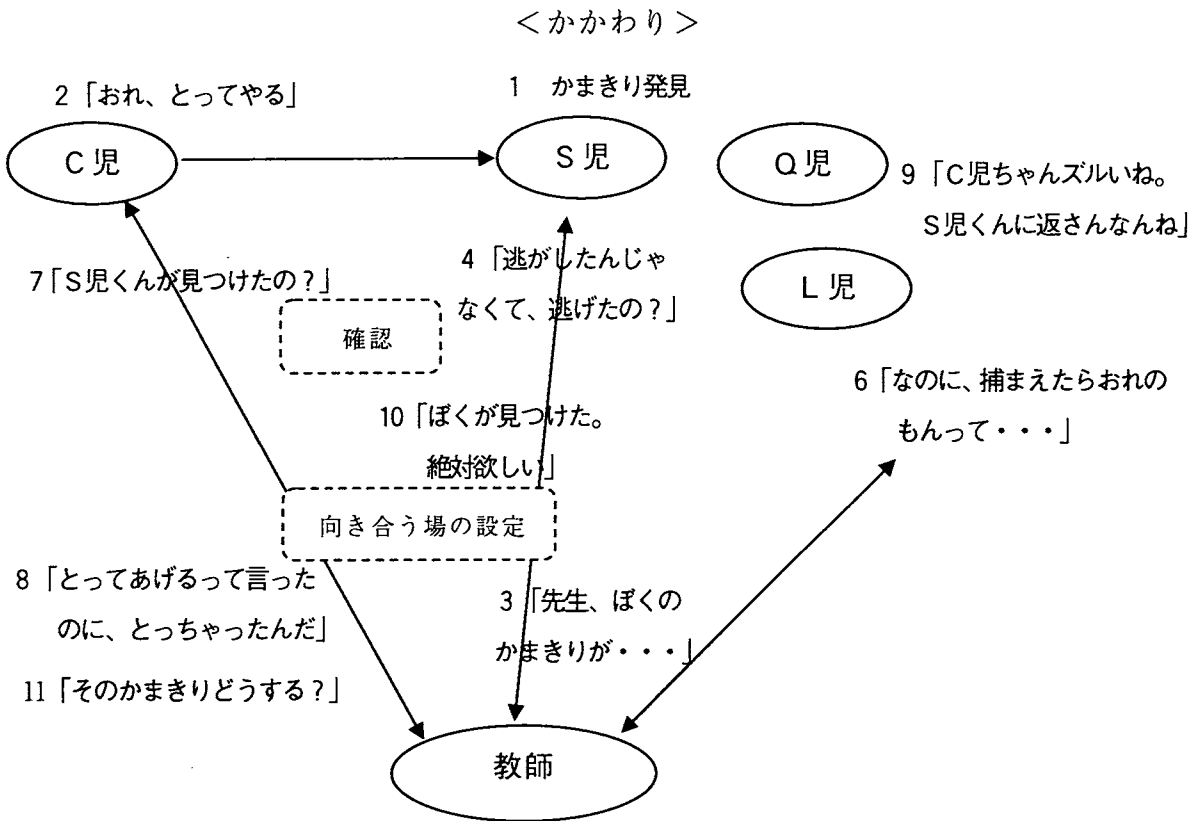
教師はS児の返事を聞き、その真剣な顔を見ながら頷いた。そして、

教師 「C児くんは、そのかまきりどうする？」

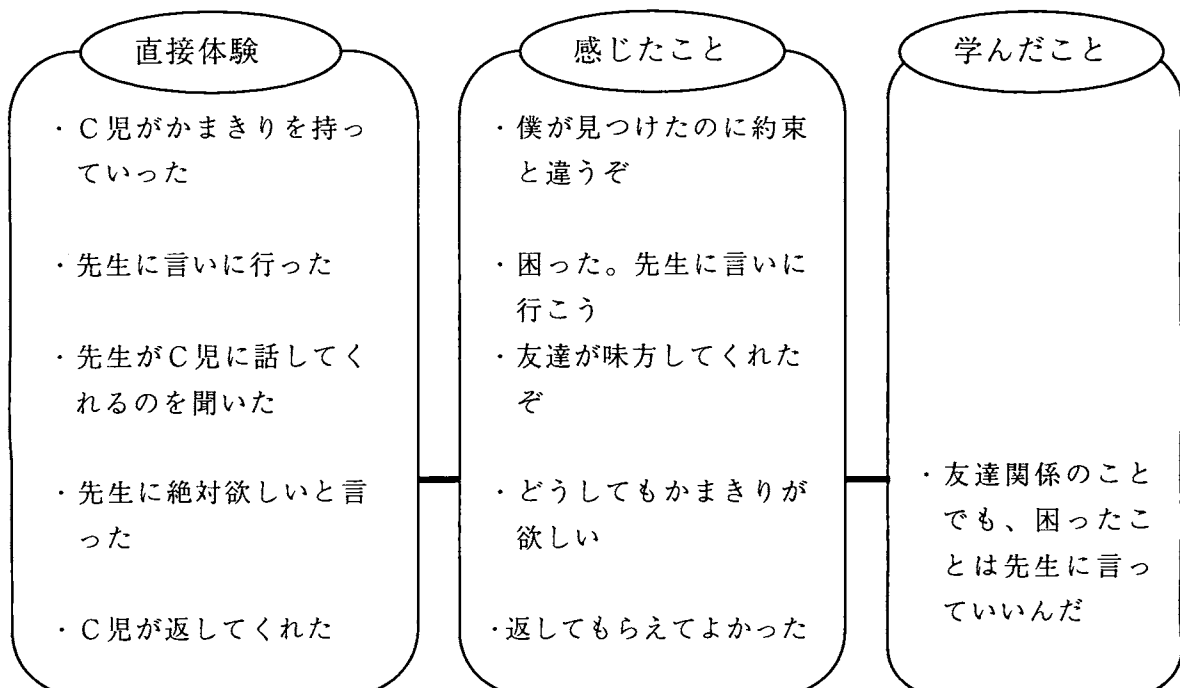
C児は、しばらくかまきりと両手で触れ合った後、顔を上げて教師を見ていった。

C児 「返す」

S児はC児からかまきりを受け取ると大事そうに両手で持った。S児の様子を見てQ児は走って材料コーナーに行き、空き箱を持ってきてS児に渡していた。



○社会的側面の学びの様相



○S児の育ちについて

今までは、言いたいことがあっても面と向かって言えなかったが、今回は一人で教師の所へ来て、目を見て訴えることができた。L児やO児の存在もあり、話し合いの場でもS児はC児を見ながら話を聞くことができた。C児が欲しいと言ったのを聞き多少不安にはなったが「絶対欲しい」と相手に譲らずに、自分の気持ちを言うことができた。

○環境の構成について

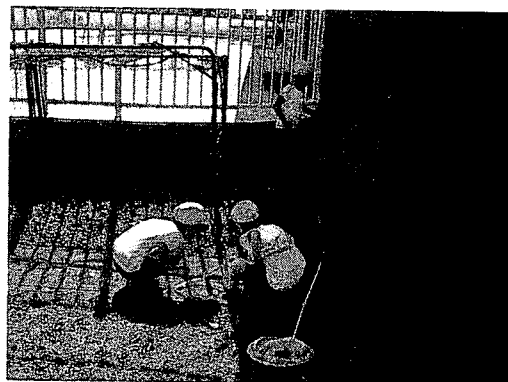
自分の話を最後まで聞き、C児と向き合う場にも後ろ盾になってくれた教師の存在があることで、S児は自分の思いを出すことができたのだろう。S児のように、他児に自分の思いを直接伝えられない幼児にも、共感したり支えてくれたりする教師（や友達）が側にいるということが重要である。

○教師や友達のかかわりについて

これまで教師に対して何か訴えたいことがあっても、面と向かって話すことができなかったS児だが、この事例の時には、真剣に教師を見て訴えていた。その様子を知ってか、L児やO児らが近寄ってきたので話し合いの場に二人も加えた。教師はS児が最後までC児との会話に向き合えるようにと一問一答形式でのやりとりをしながら、整理していった。

○今後に向けて

5歳のこの時期としては、「ほくが最初に見つけた。絶対欲しい」というS児の自己表出は、表現力としては物足りないかもしれないが、今後、このような場面に出くわしたときに自分の言葉で解決していけるように、友達との関係を丁寧に見ていく。



お店やさんごっこ遊びの続きで、前日からプレイルームには迷路がつくられている。この日は、M児の提案で迷路の中に積み木の家ができていた。B児、C児も積み木を運んだり並べたりし、完成した家で3人は交代交代で横になっていた。S児は3人がベッドをつくっている間、黙々と迷路を回っていたが、家が完成したのを見て自分も寝ようとした。

C児 「S児、入ってなかったよ」

S児 「えっ、そうやったけ？」

C児 「B児ー。M児ー。S児入ってなかったよな？」

C児は積み木置き場に積み木を取りに行っていたB児とM児に確認して帰ってくる。

C児 「やっぱ、S児入ってなかったって」

S児 「・・・」

S児は何も言えず、立ち止まっている。その間に、C児は行ってしまった。S児は3人の様子を見たまま、まだ立ちつくしている。しばらくして、S児は、何か言おうとしたけれどやっぱりやめたという様子で他の所へ行こうとしたので、教師は声をかけた。

教師 「S児くん。入りたかったんでしょ？お願いしたら？」

S児 「・・・・・・うん」

うなづいたものの、S児の表情はさえない。そこへ、教師がS児と話しているのを見たM児が近づいてきた。

M児 「どうし(たん?)」

S児 「おれも、やりたいんやけど」(M児が話し終わらないうちに、言い出した)

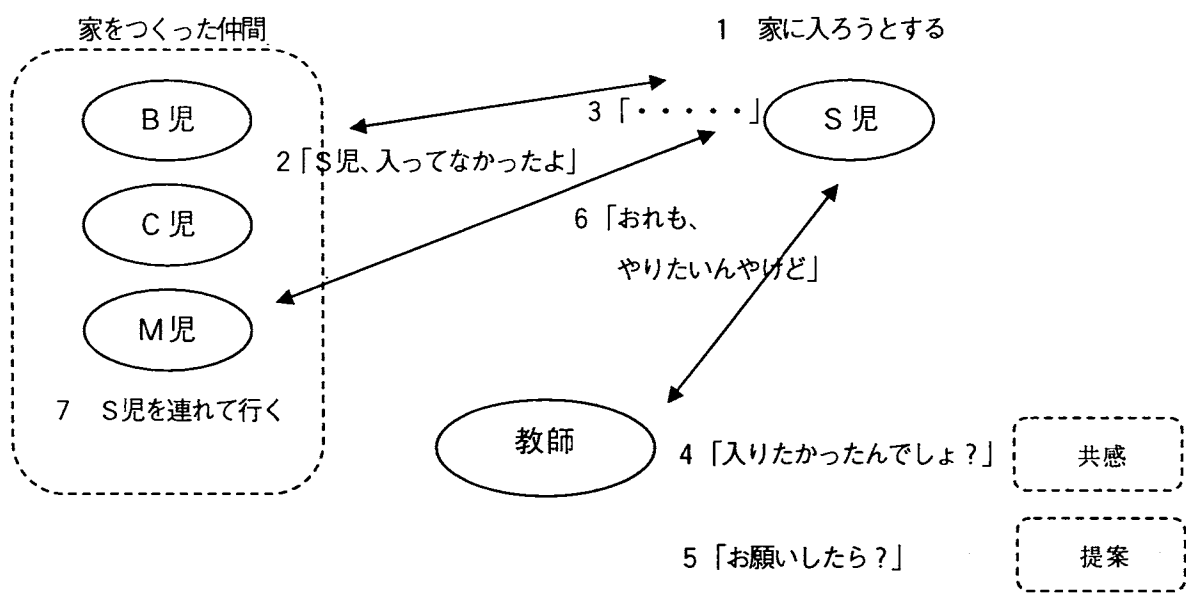
M児 「S児もやりたかったん？なら、B児とC児にも聞いてくるわ」

M児は、B児、C児にS児が入っていいか聞き、S児と教師の所へもどってきた。

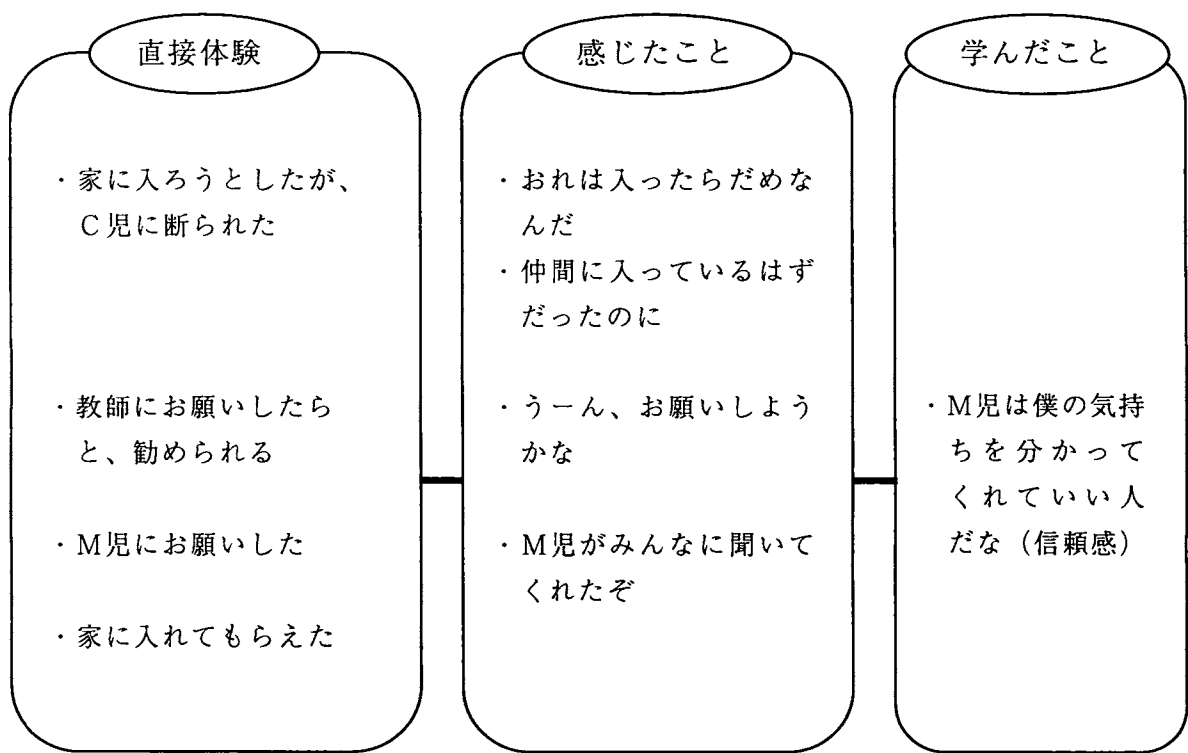
M児 「S児、入っていいって。行こう」

M児はS児を連れて積み木の家に行き、ベッドなどの説明をした。そして、4人で交代交代に寝たり、迷路をしたりして遊んでいた。

<かかわり>



○社会的側面の学びの様相



○S児の育ちについて

S児の最初の返事から、S児は友達とイメージがずれたまま、同じ場で遊んでいたことが分かる。一緒に遊んでいるつもりだったC児から断られてしまったとき、今までならすぐに別の場へ行ってしまうていたS児だったが、今回はその場で悩む姿が見られた。C児に『自分も寝たい』という気持ちを上手く伝えられず、「入ってなかったよ」と言われた後にどう言えばよいか戸惑ってしまったが、他の友達の仲立ちで同じ場で遊ぶことが出来た。

○環境の構成について

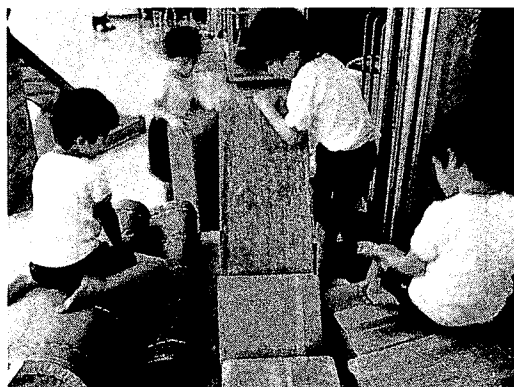
数日前まで園全体を使ってお店ごっこを行っていた。その時の経験から、迷路コーナーでもどんどん仕掛けをつくって改良しようとする姿が見られていた。そこで、前日から改良しながらつくった迷路をかたづけずに残しておいた。同じ場で遊んでいると思っていたS児と、さらに迷路をおもしろくしようと場をつくっているB児、C児、M児とでは、空間は共有していても思いのズレが生じていた。

○教師や友達のかかわりについて

一緒に遊んでいるつもりだったC児から「入ってなかったよ」と言われ、戸惑っているS児を見て、教師は他の3人との思いがずれていると感じ、S児に声をかけた。S児の思いを他の3人にも聞いてもらうことで、幼児ら同士で思いのズレに気づいて欲しいと思った。実際には、M児が仲介役となりS児の思いを代弁してくれたことでS児が遊びの場に戻る事ができた。教師はM児のかかわりを評価すべきであった。また、いつもB児にお伺いを立てている友達関係の構図については、もう少し様子を見ていかなければならない。

○今後に向けて

今回、S児の思いを代弁し仲をとりもってくれたM児との関係を見ていく。また、これまでS児が関心をもっていたB児、C児との関係を継続して見ていく。



L児、O児、S児、Q児がトイレットペーパーの芯などで武器をつくっている。そのうち、誰からとなくつくった武器でたたかいごっこが始まり、四人は教室から出て行った。しばらくして、S児とO児が製作コーナーに戻ってきた。S児もO児も先ほどつくった武器がこわれてしまったようである。

S児 「青いガムテープ、はろっと」 （誰に言うでもなく）
O児 「・・・・・・・・」 （S児の手元を見ている）
S児 「ここ、こうなんかな」
O児 「・・・・・・・・」

S児は自分の武器の修理に夢中にある。独り言をつぶやきながら、自分のイメージに合うように修理している。O児はS児の修理の様子を見ながらニコニコしている。そのうちO児も、S児の武器と自分の武器を見比べるようにしながら、自分の武器の修理を始めた。数分後、

S児 「ここに剣当たっても大丈夫」 （武器を見つめながら自画自賛という感じで）
O児 「・・・・・・・・」 （S児の武器を見ている）
S児 「ここに剣当たっても跳ね返せる。O児、ちょっと当ててみ」

O児はだまって自分の武器でS児の武器を払い落とそうとした。

S児 「キーン！」 （O児の武器を自分の武器で受け止めながら）
「ほら、ここで止めたら大丈夫で、ここは銀（のガムテープ）やから、もっと強くて・・・」

S児の説明をO児は興味津々という表情で聞き入っていた。その後も、剣を当て合ったり技の真似をしたりしながら、二人の武器談義が十分ほど続いていた。

L児、Q児のもとへO児、S児が戻り、自分のつくった武器でたたかいごっこが再開された。4人とも敵味方無く、自分の武器で技を繰り出しながらたたかっている。

L児 「サンダースペシウムアタック」
S児 「カーン」

Q児 「ドラゴントリプルクラッシュ」

S児 「キーン」

Q児 「あっ、おれの壊れた。ちょっとタイム。おれ、直してくるわ」

S児 「(おれの剣) 強えー。また、ここで跳ね返した」(剣を大事に見直しながら)

4人とも、武器が壊れたら製作コーナーへ行って修理をし、またたたかいの場にもどってくるという繰り返しで、かたづけの時間になるまでたたかいごっこを続けていた。

事例 5-3 「ぼくがつくったハンマーを見て下さい」

12月11日(月)

かたづけ後、牛乳タイム(今日の出来事を発表する時間)に、普段自分からは発表したことのないS児が手を挙げていた。見るとO児も手を挙げており二人でニコニコ見合っていた。当番に当てられると

O児 「この鉄砲をつくりました」

S児 「ぼくがつくったハンマーを見て下さい」

O児もS児も恥ずかしそうに早口で言い、言い終わるとすぐに席に着いた。そのため、「あんまり見えなかった」「もう一回見せて」という声があがった。その声を聞いて、二人は戸惑っている様子だった。せっかく自分から発表したのに、二人が一生懸命つくった武器のことが他の幼児に伝わっていないと教師は感じた。

教師 「S児くん、そのハンマー強かったんだよね。どこ、工夫してあるの？」

S児 「えっと、ここ銀色のテープで丈夫にしてあるのと、このひもをつけて回せるところ」

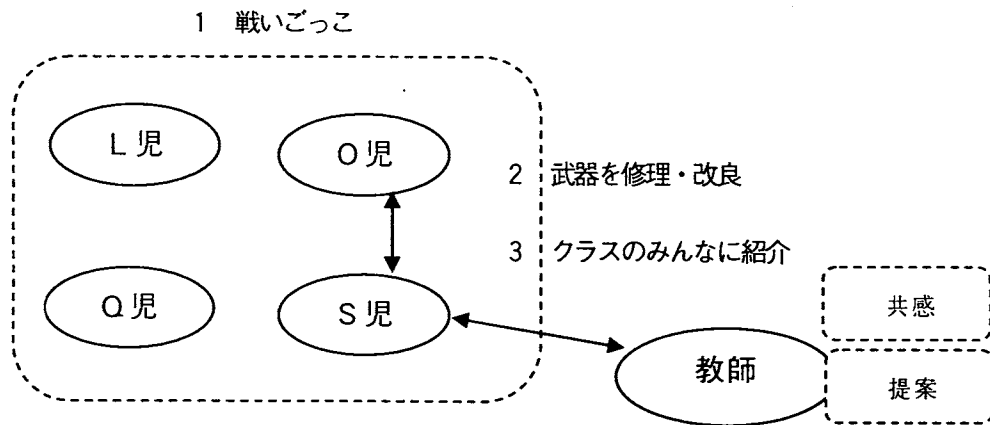
教師 「O児くんの工夫したところはどこですか？」

O児 「・・・・・・(トイレットペーパーの) しんを組み合わせてつくったところ」

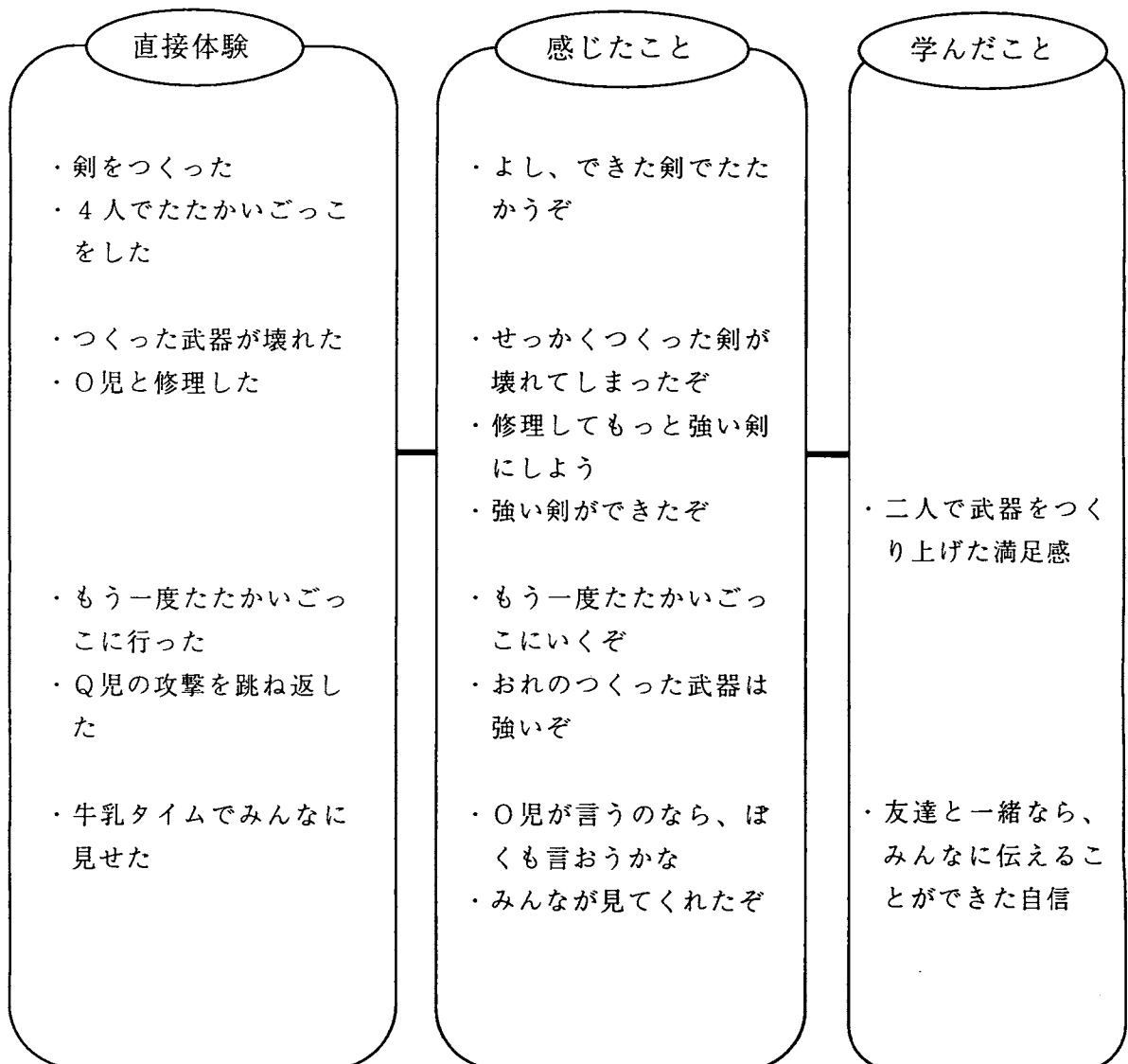
教師 「みんなもう一回見たいって言っているけど、どうする？」

二人は立ち上がって教師の所へ来て、小さな声で「見せる」と言うと、サークルをぐるっと一周しながら、他の幼児からの使い方の質問にも答えていた。何人からも質問されていたが、二人ともいやというよりは、みんなが身を乗り出して見てくれる様子を見てとても嬉しそうだった。

<かかわり>



○社会的側面の学びの様相



○S児の育ちについて

自分の思いを伝えることが苦手で、これまで遊びの中で悲しい思いをすることも時折見られた。今回の事例では、L児、Q児、O児とたくさんの言葉を交わしながらたたかいごっこをしたり、つくったりし、四人だけの雰囲気の中で遊び込んでいた。最初に偶然O児と同じタイミングで武器が壊れ、二人一緒に修理の場に居合わせたことで、O児と二人だけのかかわりがうまれた。S児は今まで自分から牛乳タイムで発表することはなかったが、O児と一緒になら言ってみようという意欲につながったのだろう。

○環境の構成について

遊びの途中でも修理したり改良したりと遊びのイメージを膨らませる材料が用意してある製作コーナーを設置していた。そのため、同じように壊れて修理することになったO児との間に仲間意識がうまれたのだろう。

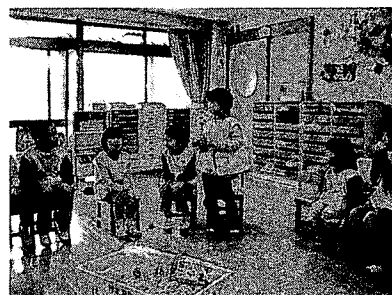
毎日、牛乳を飲むときに、その日に起こった出来事やつくった製作物などを発表する時間を設けていたことで、日頃思いを出すのが苦手なS児やO児も、安心して伝えてみようと思ったのだろう。

○教師や友達のかかわりについて

本事例では、4人がたたかいごっこという同じイメージでつくったり、たたかったりし、その4人にしか入り込めない雰囲気の中で遊んでいたため、そばにいて教師は見守ることにした。この4人の中には、たたかひの途中でも自由に出たり入ったりできる信頼感ができていたことが伺える。特にO児との間には、言葉を発しなくても体で話しているかのようにしながら武器の修理をしていた。二人でつくったそれぞれの武器にも特別の思いがうまれた。このことで二人の間に信頼感のようなものがうまれ、牛乳タイムでも二人一緒に発表してもいいかなという意欲につながったのだろう。

○今後に向けて

お互いにみんなの前で発表することが苦手なS児とO児だが、言葉をあまり交わさなくても思いが通じ合う二人の関係を追っていく。その中で、今回のように、二人一緒にでも他の友達に自分の思いを発しようとしているときには、必要に応じて援助したり評価したりしていく。



P児、S児、L児が、表現会の劇で王子様が使っていた剣を使い、たたかいごっこをしていた。表現会のたたかいの場面で、友達がわざと大げさに斬られる演技をしていたこともあり、3人は敵味方関係なく剣を構えたり当てたりすることを楽しんでいた。



P児 「くらえ！ブリザード・スラッシュ！」

L児 「カーン」（攻撃を剣で受け止めながら）

L児 「サンダー・アタック！」

S児 「痛っ！」

S児はL児の攻撃を剣で防ごうとしたが、手の甲に当たって剣を落としてしまった。P児とL児は、気にせずたたかいごっこを続けている。S児は保健室に行くつもりだったのか保育室から出て行こうとしたが、引き返してきて手を押さえてその場でしゃがみこんだ。顔は痛みをこらえて歪んでいた。P児はS児がやられたポーズをとっているだけだと思ったのか、再度、たたかいを挑もうとした。

S児 「ちょっと、タイム」

P児 「どうした？」

S児 「L児の剣、手に当たった」

と言いながら、S児は片目を交互につむりながら痛そうな表情を続けている。近づいてきたL児の表情からずっと笑顔が消えた。

L児 「ごめん。強くやりすぎた？」

S児 「・・・・・・」

手を押さえ、下を向いたままだった。数秒した後、顔を上げた。先ほどまでの深刻な顔から、少し明るい顔に変わっていた。

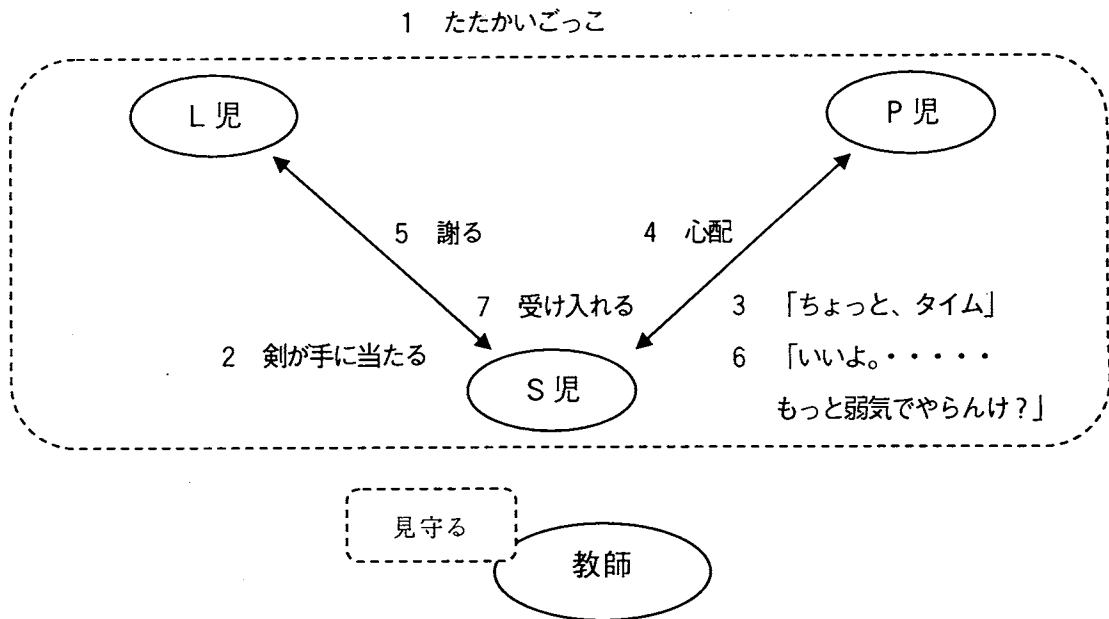
S児 「いいよ。・・・もっと、弱気（弱めの意）でやらんけ？」

P児 「そやなあ。体を強く叩くの、なしにしようぜ」

L児 「わかった。それで、やろうぜ」

3人はたたかいごっこを再開した。3人とも、今度は剣をねらうときは強く、体に当てるときには弱くと力加減を気にしながら、王子のポーズをとってたたかいごっこを楽しんだ。

< かかわり >



○ 社会的側面の学びの様相

直接体験	感じたこと	学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 剣でたたかいごっこをした ・ 剣が手に当たった ・ 保育室から出て行こうとした ・ 引き返した ・ 友達が心配してくれた ・ L児が謝ってくれた ・ 弱気でやろうと提案した ・ P児やL児が思いを分かってくれた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 剣のたたかいごっこも楽しい ・ とても痛いよ ・ 保健室に行こう ・ みんなといっしょに遊びたいな ・ L児は痛い気持ちを分かってくれた ・ L児を許してあげよう ・ 弱くしたら、ほくだつて痛くないのに ・ これでたたかいごっこが続けられるぞ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 痛くても自分の思いを自分で言わないと伝わらない ・ 友達の思いやり

○S児の育ちについて

今までは、楽しく遊んでいてもイヤなことや困ったことがあると、別の場へ楽しい遊びを見つけに行くことが多かった。本事例では、剣が手に当たって痛い思いをしたが、たたかいの場を離れず、どうにかたたかいごっこを続けようとする姿が見られた。さらに、「ちょっとタイム」と遊びを中断する言葉をかけられたことで、P児やL児に自分の思いを聞いてもらえる場をつくることができた。大好きな友達ともっと遊びたいという気持ちと、P児やL児がS児を心配し気持ちを察して謝ってくれたことで、S児は自分なりの考えを伝えることが出来た。

○環境の構成について

表現会で使った衣装や道具などを誰でも使えるように保育室に用意しておいた。友達の劇を見たことで、別の劇をした幼児があこがれを抱き、遊びのイメージがふくらんでいったのだと思われる。それまでのたたかいごっこでは、やっつける方がカッコいいという考えがほとんどだったが、表現会で上手にやられる演技が見られたことで、倒れ方ややられ方にもスポットが当てられるようになった。

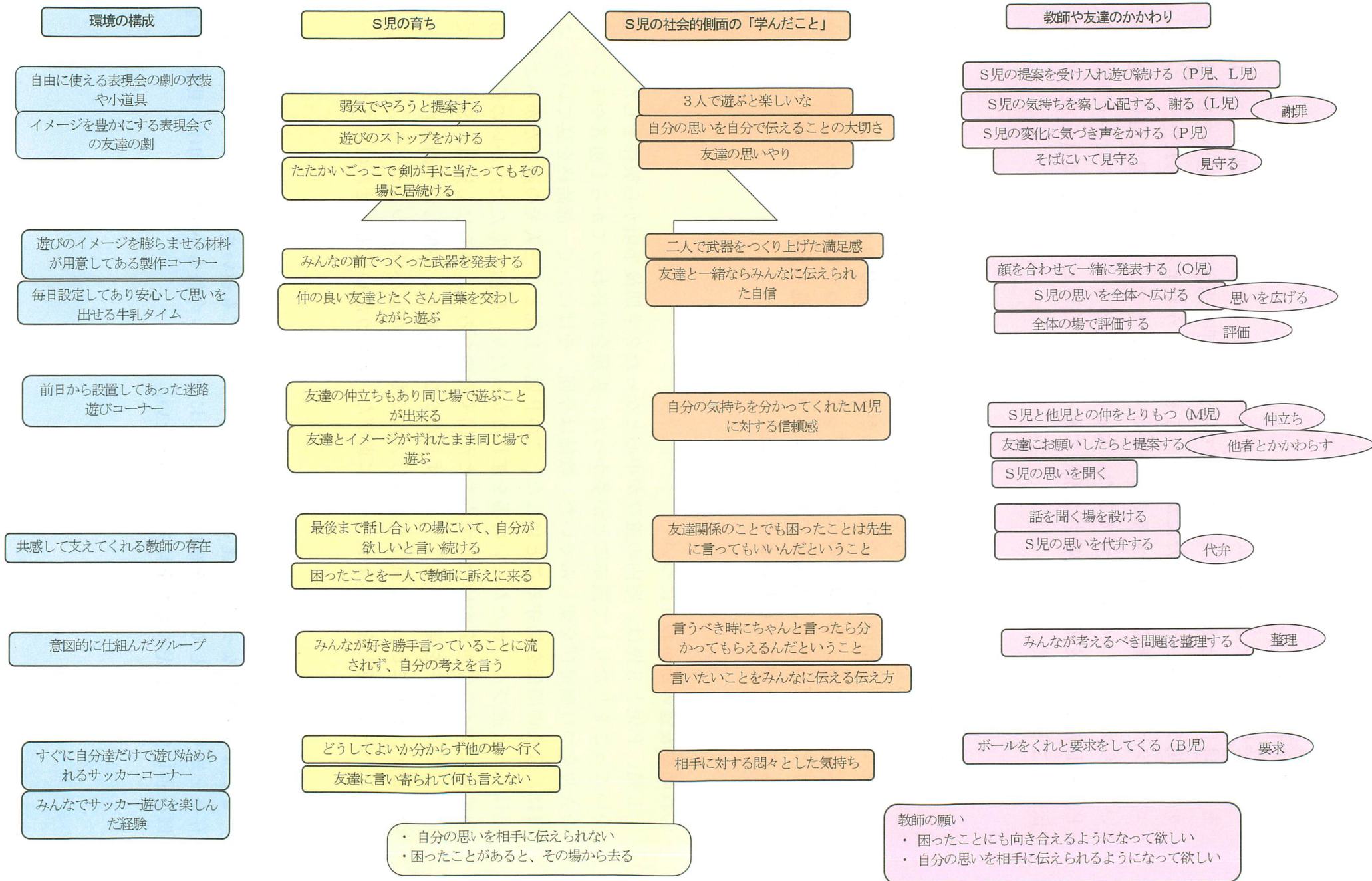
○教師や友達のかかわりについて

L児、P児とS児は、室内の遊びが中心となった2学期後半頃から製作をしたり、たたかいごっこをしたりして遊ぶことが多かった。表現会が終わってからも勇者やモンスターの衣装をつけ劇遊びを楽しんでいた。教師は今回、そばにいて一部始終を見ていた。この日は、3人の関係を見守ることにした。このP児、L児との三人での遊びだからこそ、S児はもっと遊びたいとたたかいの場を離れなかったり、騒然としたたたかいの最中に勇気を出してタイムの声をかけたりすることが出来たのだろう。さらにL児は、S児がとても痛がっている様子を見て、ちょっと強すぎたかなと判断し、心配したり謝ったりした。このことが、S児にとっては気持ちを受け入れてもらえた安心感につながった。さらに、このメンバーで気持ちを伝えながら一緒に遊びたいという思いにもさせたのだろう。

○今後に向けて

S児は3学期になって、友達との思いにズレが生じていても違いを受け入れてくれる友達の存在を知り、安心して遊びを続けられるようになった。今後も小学校に向け、具体的な事例を通してS児の育ちを見守っていききたい。

1年を振り返って ～S児の姿から～



<一年を振り返って>

(1) S 児の社会的側面の「学んだこと」と育ちについて

- ・進級時、S 児は自分の思いを相手に伝えられず、困ったことがあるとその場からいなくなってしまうたり、譲りたくない物でも相手に譲ってしまうたりしていた。そのため、「相手に対する悶々とした気持ちをもつ経験」をすることが多かった。そこで、S 児が友達とかかわる時には、教師は言葉を補ったり、後ろ盾になったりしてきた。その中で S 児は、「言いたいことを伝える伝え方」を学び「伝えることができた自信」をつけてきた。それらは、遊びの中で「仲の良い友達に自分の思いを伝える」という姿につながっていった。遊びの中で自分の思いを伝えることをくり返し学んでいくことで、さらに自信がつき、集団の中で自分を出していけるようになった。例えば、牛乳タイムの中で、決まりきった言い方ではあるが、「友達と一緒にみんなに伝えること」ができたことである。さらには、遊びの中で困ったことが起きてもその場から離れず、友達に気持ちを伝え「言いにくいことでも相手に伝えなければならない大切さ」を学ぶことができたと考える。

(2) 学びを支える環境の構成と教師や友達のかかわりについて

○環境の構成について

- ・S 児のように思いを出すのが苦手な幼児は、友達とのトラブルにもならず、不満を抱えて生活していることが多い。そのような幼児には、教師との楽しい共通体験と、教師がいる安心感が大切であることが再確認できた。教師と一緒にあって毎日のようにサッカーなどをして遊び、楽しい雰囲気をつくってきた。また、牛乳タイムという自分の思いを発表する場で、教師も一緒にあって友達の話聞き、何を言っても受け入れてもらえる雰囲気をつくってきた。S 児にとっても、もちろん物的環境をないがしろには出来ないが、まずは安心して園生活を送れる環境を構成していくことが大切である。

○教師や友達のかかわりについて

- ・事例 1, 2 のように教師が見守っていただけでは、S 児の思いを引き出せなかった。教師が共感したり、思いを代弁したり、言葉を補ったりというかかわりが S 児にとって足りなかった。そのような中で、S 児が思いを出せるようになってきたのは、教師との間に少しずつ信頼感ができてきたこともあるが、仲の良い友達が S 児の思いを汲み取ってかかわってくれたのが大きい。自分の思いを分かってくれるという安心感や思いが伝わった嬉しさが、S 児の思いを伝えようとする意欲につながっていた。